
魔法少女リリカルなのは ANGEL'S OF DARKNESS

エクセル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは ANGEL'S OF DARKNESS

【Nコード】

N6860W

【作者名】

エクセル

【あらすじ】

第二次P・T事件から半年あまり再びミッドを救った機動六課の隊員達は、元の部隊に戻り活躍していた。

そんなある日の夜、管理外世界にいたエクセルに新たな敵が襲うそれが始まりだとも知らずに

プロローグ

第二次P・T事件から半年あまり
再びミッドを救った機動六課の隊員達は、元の部隊に戻り活躍して
いた。

そんなある日の夜、管理外世界にいたエクセルに新たな敵が襲う
それが本当の始まりだとも知らずに

運命にぶつかったとき、信じるのは自分か、それとも仲間との絆か
見つめよう・・・世界の命運を

狭間の世界で、はじまりの日を・・・

さあ、扉を開けよう

真実という名の扉を・・・

開けるのは・・・あなただ

衝撃の展開にご期待ください

プロローグ（後書き）

全てが懐かしい

なぜ、俺はここにいます

あいつは俺を殺した

憎いな・・・

プロローグ？（前書き）

第二次P・T事件から半年

ミッドチルダを救った機動六課は解散

執務官、次元航行部隊に復帰したエクセル・アーシュライトは現在
管理外世界にいた。

プロローグ？

―第118管理外世界―

文化レベルB

魔法文化なし

なのは達の世界と同等と思っていていい。

俺は、エクセル・アーシユライトはその世界にいた。

現在いる場所のは都市。

詳しく説明すると、都心部の酒屋にいた。

エクセル「……うまいな、この酒は」

黒い執務官服に身を包んだエクセルは、グラスを置いた。

中身は酒だが、そんなに酔うほどではない。

店員「お客さん、お仕事はなにを？公務員ですか？」

エクセル「ええ……そんな所です。」

魔法文化のない世界で、魔導士と言っても笑われるだけだ。

すると、エクセルの隣に若い青年が立った。

ソラ「失礼します、アーシュライト執務官」

この、いかにも青年ですと言ってくれという顔の名前は、ソラ・カミナ。

年齢は17歳。もちろん立派な青年だ

透き通る青い瞳とこの顔で自分と同じ年と言ったら誰もが疑うだろう。

2ヶ月前から俺の補佐官として配属された

エクセル「来たかソラ。マスター、こいつにアルコールなしのカクテルを…」

ソラがエクセルの隣に座り、店員から出されたグラスを見た。

ソラ「執務官…」

エクセル「アルコールはなしと言ったる。安心しろ」

ソラがグラスを取って、赤いカクテルを飲み干す

ソラ「・・・エドが目標を見つけたそうです。」

エクセル「・・・了解。マスター、お金はここに」

テーブルにこの世界のお金を置く

店員「お仕事ですか？目標って言ってましたけど」

エクセル「・・・ええ、なんせ“化け物”ですから」

店員は怖くなったのか、ブルツと震えた。

ー公園ー

閉鎖領域に囲まれた空間にそいつはいた

黒い獣だ。人の二人分ほどだ

それに立ち向かう青年

エドワード・ミナ。通称エド

量産された魔導杖を構えた熱血漢を漂わせる青年が、堂々と黒い野獣の前に立った。

エド「俺様が相手だ！！」

相手の赤い目が、エドの目を見た。

エクセル「待て、エド・・・！！」

閉鎖領域に入って、エドの後ろに降り立つエクセルとソラ

エド「待ちませんよ!!」

エドが駆けた。相手に突っ込みながら、杖から魔力弾を撃つ

黒い獣「グルルルル!!」

敵が吠えた。同時に、黒い小さな矢がエドに放たれた。

エド「遅い!!」

ジャンプして、黒い獣の背中に乗った。

魔導杖を獣の頭に、向ける

エド「くたばりやがれ!!」

魔力弾を放とうとした、がその前に獣が動いた。

黒い獣「グオオオオ!!」

獣が暴れ、エドが落ちた。

エド「うおっ!!」

エドが倒れると、黒い獣がエドに牙を向けた。

エド「うわああ!!」

すると、エドへ飛び掛かろうとした獣の体を白い矢が、いくつも貫い

た。

黒い獣「グルルルアアアア!!」

黒い獣が白い矢が飛んできた方へ向いた。

エクセル「お前の相手は俺だ…」

執務官風な黒いバリアジャケットについた白いマントが風で揺れた。

エクセルの執務官時のバリアジャケットだ

黒い獣がエドからエクセルに標的を変えて、突進してきた。

エクセル「離れてろ……」

ソラがエクセルから離れる。黒い獣がエクセルに飛び掛かってきた

エクセルは懐にあった剣に手をかける。

黒い獣が、エクセルに触れようとした瞬間

エクセルの剣が抜かれ、獣の顔から胴体を両断した。

両断された獣の胴体は、エクセルの後ろに落ちる。

エクセルは剣。自分のデバイスであるブランド・ティータを鞘に納めた。

エクセル「ソラ、処理を頼む。」

ソラ「了解！」

エクセルがエドに近寄り、手を差し伸べた。

エド「すみません執務官。またやってしまいました」

エクセル「その癖をどうにかしろ。それでも俺の部下か」

エクセルは呆れたように手を掴んだエドを引っ張り、立ち上がらせる。

この短髪で、俺より4センチ高い身長175はあるエドは、突撃思考が絶えないのだ。

逆にソラは、自分と同じ身長でスレンダーで、髪は普通で冷静沈着だが自分が危機に陥ると、自分でも厄介になる男だ。

この二人、俺の補佐官なのにまだまだヒヨツ子だ

エクセル「ソラ、処理は終わったか？」

ソラ「はい。2分後に転送ポートで、回収班が来ます」

エクセル「そうか。じゃあ、それが終わったら…3人でこの世界の飯でも食い行くか」

そう言うと、二人の顔が明るくなった。

エクセル「だが、回収班が来るまで警戒は怠るな」

二人「了解!!」

―時空管理局―

あれから2日が経ち、管理局に戻ってきたエクセル達3人。

???「あつ……………」

エクセル達の目の前に、金髪の女性と鉢合わせした。

女性の服装は執務官服

エクセル達3人と女性が互いに敬礼した。

エクセル「じゃあ後で、俺の部屋だソラ、エド。」

ソラとエドが、女性の横を通り過ぎ角を曲がっていった。

???「……………」

エクセル「……………」

???「もう、いいんじゃないかな?」

エクセル「そうだな…周りに誰もいないみたいだし」

二人は近づくなり抱き合った。

???「久しぶり、エクセル……」

エクセル「ああ、久しぶりフェイト」

お互い離す。この女性の名前は、フェイト・T・ハラオウン。

エクセルと同じ執務官であり、管理局で名前を知らない者はいない。

クロノ提督の義妹であり、機動六課の元メンバーで

エクセルとは恋人関係にある。

執務官に復帰したとはいえ、俺と彼女は3ヶ月も会えなかった。

それほど、今はお互いに忙しいということだ

フェイト「あの二人は補佐官？」

エクセル「そう。突撃思考たつぷりの補佐官達（笑）」

フェイト「フッフ、大きかった方の方は正にそんな様に見えたよ（笑）」

歩きながら、会えなかった3ヶ月間の話をしていた。

エクセル「同期のあの二人を見ると、スバルとティアナに見えてくるよ」

フェイト「六課が最初に出来た時は、まったくその通りだったよ」

―食堂―

フェイト「じゃあ、管理外世界にも・・・」

エクセル「・・・ここ最近、出現範囲が広まってる。最初はミッド、第2管理内世界、そして第3、第4と……」

画面に出現範囲を表示する。

フェイト「はやくにも依頼が来てるみたいだけど、今の仕事が手間取ってるみたいで」

エクセルはふつとある女性の名前を口にした。

エクセル「そういえば、なのははどうしてる？」

フェイト「ヴィヴィオの話じゃ、今度休暇を取って、故郷に帰るって……」

なのはの故郷

管理外世界出身の彼女の家は、極東の小さな島国だとか

エクセル「へえ、俺も行ってみたいな」

フェイト「いい所だよ 友達も紹介したいし（笑）」

そんな世間話をしていると、時間になったので

俺達2人は、互いの仕事に戻っていく。

この1週間後、戦いが始まるとは知らずに

プロローグ？（後書き）

ああゝ

苦しいな

体を切り裂かれたこの苦しみ

ねえ、はやく出してよ

暴りたいのよ

この爪もつづいてるの

第1話 始まりは異世界で（前書き）

この体・・・

この気持ち・・・

本当に快感だわ・・・

あら、出してくれるのね

第1話 始まりは異世界で

ー無限書庫ー

ヴィヴィオ「」

ユーノ「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ヴィヴィオが明るい表情で、出口に向かっていく

ユーノは、ヴィヴィオの荷物になる分厚い本を2冊ほど運んでいる。

ユーノ「ヴィヴィオ、こんな分厚いのを持って行くと・・・」

ヴィヴィオ「大丈夫ですよ」

出口を出ると、ユーノが持っていた本を大きなバックに入れるヴィヴィオ

ヴィヴィオ「向こうに行ったら、皆さんに見せるものですから」

ユーノ「無限書庫のものを管理外世界に持っていくのは、かなり大きな許可がいるんだけど、その辺を通してのことだね？」

ユーノが言うと、ヴィヴィオは笑顔になり、こう言った。

ヴィヴィオ「本を貸してください って言ったら、許可してくれました」（笑）」

ヴィヴィオが許可書を見せた。

ユーノ「恐ろしい笑みだな〜（汗）」

???「ユーノくん ヴィヴィオ〜」

通路の奥から、サイドアップに髪を結んだ女性が走ってきた。

ヴィヴィオ「あつ、ママ〜」

ヴィヴィオが手を振るう。

???「支度出来た？」

ヴィヴィオ「うん いつでも行けるよ〜」

ユーノ「なのは、皆によろしくね」

女性の名前は、高町なのは

管理局の中で、フェイトと並ぶエリートであり有名な教導官でもあり空戦魔導士

魔導士の憧れでもある彼女は、エースオブエースという呼び名で呼ばれるほどだ。

なのは「うん じゃあ、行ってくるねユーノくん（笑）」

ヴィヴィオ「行ってきますす、ユーノ先生」

「エクセルの部屋」

ピピピピピ

エクセル「・・・・・・・・・・」

報告書を書いていたエクセル。

ピピピ

エクセル「よし、報告書は終わりつと・・・・・・・・」

エクセルが椅子から立ち上がると突然、通信画面が開いた。

??? ヤッホー

画面に青い髪の女性が映った。いや、このテンション高い奴を女性と言ったらいいのか区別が出来ない。

エクセル「どうしたスバル？」

スバル・ナカジマ。ミッドチルダ湾岸特別救助隊の防災士長であり、六課のFW陣の一人だった。

スバル あのだ、ティアと連絡がつかないんだけどさ、知らない？

エクセル「ティアナか？うーとティアナは確か」

―第2管理世界―

ティアナ「―――――なによ」

―エクセルの部屋―

エクセル「忙しいんだよティアナは」

スバル「だよね」

なにが言いたいんだ。

スバル「じゃあ、また連絡するね」

通信画面が閉じた。

エクセル「なんだったんだ？」

すると、今度はドアが開いた。

ソラ「失礼します。執務官、時間ですので・・・」

エクセル「ソラ、悪いな・・・通信が入ってたから行けなかった」

エクセルは、ソラと一緒に部屋を出た。

ソラ「これが、アンノオンの出現予想された世界です」

廊下を歩きながら、ソラから資料を渡された。

あの黒い獣は、アンノオン扱いになっていた。

なにせ、獣の種類は様々で正体不明なのだから

残骸を回収してはみたものの、残骸は3日足らずで自然消滅してしまっただから。

エクセル「管理外世界がやはり多いな・・・ここも・・・うーん・・・えっ？」

エクセルは、ある管理外世界のリストを見た。

エクセル「なんで・・・」

エクセルが立ち止まるとソラが近寄って、リストを見た。

ソラ「第97管理外世界……この世界がなにか？」

エクセル「ソラ、俺達が管理外世界から帰ってきたのは？」

資料に目が釘付け状態のエクセルが言った。

ソラ「はい？……1週間は前ですが」

慌てた表情でエクセルは資料をソラに押し付ける

エクセル「ソラ！艦に行つて、出航準備だ！！」

ソラ「えっ！？今ですか！！」

エクセル「ああ、エドを連れて一時間以内に出航準備だ！！」

ソラ「ええ！？」

エクセルは走りだし、急いで自室に戻って行った。

第97管理外世界

現惑星名称「地球」

出現場所「極東島国 日本」

出現率

現段階 80・91%

資料にはそう記されていた。

なのはの世界

管理外世界では行動は厳しく、リミッター制限が激しい。特に今、
なのはのリミッター制限はAランク扱いなのだ

そんな状態で大群に襲われたら

いくらエースオブエースといえど

エクセルは最悪の場合を考えてしまった

ーその頃 海鳴市ー

なのは「海風が心地いいね」

ヴィヴィオ「うん」

高町親子は現在、海岸沿いを歩きながら、なのはの実家へ向かって
いた

なのは「家に着いたら、荷物を置いてお出かけだね」

ヴィヴィオ「皆さんに会えるの楽しみだな」

ウキウキしたヴィヴィオを見たなのはは笑って、立ち止まった。

ヴィヴィオ「なのはママ？」

なのは「この奥が、フェイトママと初めて名前を呼び合った場所だよ（笑）」

なのはが指差す。ヴィヴィオは、その方向を見た。

ヴィヴィオ「そうなんだ」

なのは「・・・・・・・・・・・・・・・・」

そっか。もう10何年も前になっちゃうんだ

なのはもその方向を向いた。

この場所で、フェイトちゃんと名前を呼び合って、別れて……あの頃から、変わってないな

懐かしく感じた場所は、久しぶり。なのははそう思いながら、ヴィヴィオとまた歩き出した。

その光景を遥か海の彼方で見つめていた黒い人影は
「見つけた」

ニヤリと笑った人影は、霧のように消え去った。

―高町家―

ガラガラ

なのは「ただいま」

なのはが入ると、中から

???「なのはー!!」

ヒュンヒュンヒュン!!

なのはに向かって回転した何かが飛んできた。

なのは「ふえっ!?!」

なのはは、咄嗟にしゃがんで避ける。

カランカラン!!

飛んできたものは、地面を跳ねて地面を転がった。

それは・・・・・・・・

なのは「木刀・・・・・・・・・・？」

転がったのは、木刀だった。

なのはは、家の中を見た。そこには

???「遅いわよ、なのは!!」

短髪の女性が、なのはに怒鳴った。

その女性の後ろにもう一人、ロングヘアの女性がいた。

なのはは、その2人を見て

なのは「アリサちゃん!!すずかちゃん!!」

その2人は、なのはの親友であるアリサ・バニングスと月村すずかだった。

なのはが靴を脱いで、アリサ達に駆け寄った。

なのは「久しぶり!!元気だった!!」

アリサ「アンタねーなんで・・・なんで連絡しないのよ!!」

アリサがなのは胸ぐらを掴んでぐらぐら揺らす。

すずか「アリサちゃん、落ち着いて!？」

なのは「ふえふえ〜」

なのはは既に、目を回し、持っていたバックを床に落としていた。

―五分後―

なのは「もう〜お姉ちゃん、余計なことしないでよ〜」

みゆき「私はてっきり、アリサちゃん達は知ってるものかと思ったんだよ〜」

アリサ達がここにいたのは、なのはの姉であるみゆきが2人に知らせたからであった。

前に帰ってきた時、2人を呼ばなかったことにアリサは怒っていたのだ。

すずか「ヴィヴィオちゃん、この本って異世界の歴史書なの？」

すずかが、ヴィヴィオの持ってきた本を持つ

ヴィヴィオ「はい。ミッドチルダだけじゃなくて、管理世界全部の歴史が載ってるんです」

アリサ「でも……………」

アリサがページをめくっていく。

アリサ「私達、向こうの文字は・・・ねえ（汗）」

ヴィヴィオ「あつ、大丈夫ですよ（笑）」

アリサ・すずか「えっ？」

すつとんきよな返事をする2人がヴィヴィオを見る。

すると、ヴィヴィオがなのはからレイジングハートを借りてきて

ヴィヴィオ「レイジングハート、翻訳文にして（笑）」

レイジングハート《はい。少々お待ちを・・・・・・・・》

レイジングハートが本をスキャンした。

アリサ「毎度毎度思っけどさ、この・・・レイジングハートだっけ？」

アリサがレイジングハートを指差す。

なのは「うん。」

すずか「水晶なのに凄いわよね。小学生の時なんか、ただの水晶で首からぶら下げてたのに、今じゃあふわふわ羽生えて浮いてるし…」

なのは「にやはは（笑）あれから、色々な機能入れちゃったから」

すずか「壊れないの？」

なのは「月に一度、整備してもらってるから平気だよ（笑）」

レイジングハート《その通りです》

レイジングハートが答えた。

すると、アリサとすずかの前に翻訳文した文面が表示される。

アリサ「おおー！」

すずか「わかりやすい……………」

その後、なのは、アリサ、すずか、ヴィヴィオはアリサの家に向かった。

ーアリサの家ー

庭でお茶をしながら、お互いあれから何があったのかを話をしていた。

アリサ「すずかったら、五人に告白されたのに、全部断ったのよ」

すずか「ア、アリサちゃん！？／／／／／」

すずかは頬を赤くした。

アリサ「なによゝあんな男達興味ないって言ったのは誰よゝ」

すずか「そんな事言ってないよゝ／／／／／」

手を振りながら、言ってないという仕草をするすずか。

ヴィヴィオ「だったら、なのはママも負けてないよねゝ」

ヴィヴィオの言葉に、アリサ達が反応した。特にアリサの反応は目にも止まらぬものだった

アリサ「なになにヴィヴィオ！？なのはが何！！」

ヴィヴィオ「それはゝ」

なのは「なななな、なんでもないよゝ！！あ、あはははは／／／／／」

顔を赤らめるなのはにすずかは、なんで赤くなってるの？と聞く

代わりにヴィヴィオが写真を見せる。

ヴィヴィオ「この男の人とママはキスしたんだよゝ」

ヴィヴィオが写真に写ったエクセルを指差すと、2人は

アリサ・すずか「キスゝゝゝ！！／／／／／」

なのは「あはははは（汗）」

なのはが頬をかく。

アリサ「そそそそそれで、その後は、どどどうしたの!!? /
/ / / / /」

アリサが真っ赤になりながら、なのはに聞くと
なのはは、ちよつと切なそうな表情をした。

なのは「何にもないよ……ただ、キツ、キスした後に…ゴ
ニヨゴニヨ / / / / /」

アリサに耳打ちすると、アリサは目をぱちくりし、急に真っ赤になり
ボン!!!

アリサ「きゅう~~~~ / / / / /」

アリサが真っ赤の状態で目を回しながら、気絶した。

12分後

頭にグラスをあてながら、アリサなのはにエクセルのことを聞いた。

エクセルが自分の記憶を犠牲にして、自分や仲間を救ったこと

すずか「じゃあ、今はフェイトちゃんと……………」

アリサ「アンタ、ある意味抱き逃げされたわね……」

すると、すずかがある写真を見つけた。

すずか「ねえ、この写真・・・なんでみんなボロボロなの？」

すずかが見たのは、エクセルをはじめ主力メンバーがバリアジャケットを装着してボロボロになった状態だった

なのは「これはね、解散する時にエクセルくん一人VS私達での全力全開バトル。」

アリサは写真を見て、

アリサ「一人ってかなりつらいわよね〜全員ボロボロってのはどういう事よ?」

なのは「あはは(汗)ちょっと勢いがありすぎちゃってね」

アリサ「ふ〜ん・・・・・・あれ?このフェイトに似てる女の子は誰?」

アリサがヴィヴィオの隣にいたフェイト似の女の子を指差した。

なのは「あつ、その子はフェイトちゃんのお姉さんだよ」

アリサ& amp; すずか「へえ〜お姉さんか・・・・・・ええー!?!?!?」

アリサとすずかの驚きに、なのははビクツとした

アリサ「なっ、なんでこんな小さな子が！！？」

アリサが聞くと、なのはは一度躊躇したが洗いざらい2人に話した。

アリシアのこと、フェイトのことも全部

ー10分後ー

ヴィヴィオ「なのはママ」そろそろ、ストライクアーツの練習したいよ」

ヴィヴィオが立ち上がる。

なのは「ああ、そうだね。じゃあ庭でアリサちゃん達に見てもらおうか」

ヴィヴィオ「うん」

全員が庭へ移動すると、アリサがなのはに尋ねた。

アリサ「ストライクアーツってなんなの？」

なのは「こっちで言うところ格闘技だね。」

すずか「ヴィヴィオちゃんが格闘技？ちょっと意外かも」

なのは「それでも中々やるんだよううちの娘は」

エッヘンっと胸を張るなのは

レイジングハート《準備が出来たようです》

ヴィヴィオが練習着に着替えてきた。ヴィヴィオは手には、ウサギのぬいぐるみが握られていた。

なのは「じゃあレイジングハート、仮想敵を2体。」

レイジングハート《はい。では、難易度はBへ設定します》

ヴィヴィオの周りに、黒い格好した人間が現れる。

すずか「本当に大丈夫？」

心配するすずかが、ヴィヴィオを見た。

ヴィヴィオ「じゃあ行くよ、クリス！服装は練習着のままです」

握られていたウサギのぬいぐるみが、ビシッと手を上げた。

アリサとすずかはビックリするが、この後の出来事にさらに驚くことになる

ヴィヴィオがぬいぐるみを掲げる。

ヴィヴィオ「セイグリッド・ハート、セーット アップ！」

ヴィヴィオの体が煌めいた。体が成長していき髪はサイドアップ、身長はなのはを越し服装は練習着のまま

この姿は、ゆりかごで見たヴィヴィオの聖王の姿だ

自称 聖王モード

またの名を大人モードである。

ヴィヴィオ「……………んッ！」

グローブを再度確認し、身構えるヴィヴィオ

アリサ「ヴィ……ヴィヴィオが」

すずか「成長しちゃった……」

なのは「あれがヴィヴィオの特殊な体質 フェイトちゃんなんか腰抜かしちゃったけどね（笑）」

苦笑する2人。

ヴィヴィオ「よし……！」

ヴィヴィオがステップをとりながら、仮想敵へ仕掛けた。

その速さは、スバルやノーヴェでも驚くほどだ。

ドン！

ヴィヴィオの拳が仮想敵の胴体に食い込む

ヴィヴィオが仮想敵へさらに拳を叩きつけ、横から仕掛けてきた2体の内の一体へ突っ込んで回し蹴りする

そして一体の敵の攻撃を流しながら魔力のこもった一撃を食らわせる。これが彼女の得意スタイル、カウンターヒッターだ

《COMPLETE》

レイジングハートが言うと、アリサとすずかがパチパチと拍手した。

アリサ「ヴィヴィオやるう〜」

ヴィヴィオ「ありがとうございます」

一夜

なのは「遅くまでゴメンね」

あれから、ヴィヴィオの魔法の練習となのはの教え方に驚きを隠せない二人、そして時間はいつの間にか18時を過ぎていた

アリサ「大丈夫よ 車で送って行くのか？」

なのは「あつ、じゃあお願いしようかな」

すずか「明日はみんなでお買い物しようね（笑）」

ヴィヴィオ「そうですね。あつ、クリスはお留守番かな（笑）」

ヴィヴィオの肩に乗っていたセイグリッド・ハート、愛称クリスは焦った仕草をした

ヴィヴィオ「冗談だよ」

ヴィヴィオが言うと、クリスは良かったという仕草をした。

車に乗り込んだ4人は、談笑しながら家を出ていった。

なのは「レイジングハート……」

なのはは、念話でレイジングハートに声をかけた。

レイジングハート「なんですか？」

なのは「私達は、この世界から離れて暮らしてたけど、故郷に戻って久々に友達と会うと懐かしい感じがする……」

レイジングハート「小学生の時ですか？」

なのは「うん。今でもたまに思うよ、魔導士を続けなかったらどうなってたかなって」

レイジングハート『きつと、後悔してたと思います。』

なのは『後悔？』

レイジングハート『はい。あの雪の日の出来事も含め、ヴィヴィオ達との出会い・・・これがもし全て、フェイトさんになっていたら・・・マスターはきつと後悔してました』

もし逆にフェイトが、あの雪の日の出来事で負傷して、その痛みをずっと引きずって

ヴィヴィオや六課メンバーとの出会いが全て無かったことになる。

なのは『そうだね・・・今の私がいるから、ヴィヴィオやみんながいるんだよね。ありがとう、レイジングハート』

レイジングハート『いえいえ・・・』

なのは「ねえ、ちょっと遠回りしない？」

なのはがアリサに言った。

アリサ「遠回りって、どこを通って？」

なのは「みんなで通った学校」

すずか「うん、いいかもね」

たまにはねつと、すずかが言つとアリサはため息をつき

アリサ「そうよ、たまには思い出の場所に行くのもね。よし、じゃ

あここを曲がつーっ!!!!」

アリサが急にハンドルをきった。車はガードレールにぶつかりそうになったが、間一髪免れた。

すずかは頭を抱えながら、起き上がった。

すずか「アリサちゃん？急にどうしたの!？」

アリサ「へっ、変な人がいきなり出てきたから、おもいつきりハンドルを…」

なのは「変な人？」

アリサが後ろを指さした。

確かに、ロングヘアで変な服装をした女性が道路の真ん中にいた。

幸い、道路に車もいなかったからいいものの

アリサ「ちょっとアンタ！危ないでしょう!!」

アリサが車から降りて、文句を言いながらその女性に近づいていく

すずかやなのはとヴィヴィオも車から降りた。

なのは「あれ・・・？」

なのはは、周りを見て違和感を感じた。

ヴィヴィオ「なのはママ、どうしたの？」

なのは「うん、人が居なすぎるって」

そう言われたヴィヴィオも辺りを見渡した。確かに、人は愚か、車すら走っていない。

アリサ「ちょっとアンタ聞ってるの!？」

すずか「ちよつとアリサちゃん!」

アリサを止めようと、すずかがアリサの後ろに立った。

すると、女性がアリサ達へ振り返った。

???「・・・・・・・・・・」

なのはとヴィヴィオが少しでも明かりに照らされた女性の顔を見た瞬間、体と口が反応しアリサ達に警告を発した。

なのは「二人とも、離れて!!!」

レイジングハート《特定。この場所から1キロ先まで封鎖領域です》

アリサ& amp ;すずか「えっ?」

二人が振り返った。なのはが走る前に、女性の方が素早く動いた。

???「遅いわ」

女性の両腕がアリサとすずかのみぞに強烈な一撃を与え、二人を気絶させた。

ヴィヴィオ「アリサさん、すずかさん!!」

女性の姿がはつきり見えてきた。光に照らされ、今度はちゃんと服装と顔が見えた。

なのはは、身構えた。

女性の格好は、忘れることが出来ない。

青いスーツに？という番号が印されていた。

なのは「戦闘機人NO.2・・・ドゥーエ」

その女性は、J・S事件の時にたった一人死亡した戦闘機人名前は、ドゥーエ

でも、どういう事なの

彼女は既に死んでいるのに・・・

ドゥーエ「ごきげんよう、高町なのはさん。妹達がお世話になります」

笑いかけてきたドゥーエを見たなのはは、レイジングハートを持つ。

ドゥーエ「動いたら・・・」

ドゥーエが、手に装備していた爪をアリサの首へ向ける

ドゥーエ「この威勢がいい子を殺すわよ」

なのは「ぐっ……目的はなに!!」

ドゥーエ「目的なんかないわ……そうね、あるとしたらそれは……
貴女の抹殺」

なのはは息を飲んだ。何故自分なのだろうと考えながら、アリサと
すずかの救出の方法を考えていた。

ドゥーエ「でも、それだけじゃつまらないから、この子達をかけて
勝負しない?」

楽しんでる……この人は、楽しんでる

ドゥーエ「場所は、学校にしましょうか……この先にある」

ドゥーエが指さす方向を見たなのはは悟った。自分が通っていた小
学校だ

なのは「………受けてたつわ!!」

返答を聞いたドゥーエは、アリサとすずかを抱え

ドゥーエ「じゃあ、30分後にお会いしましょう」

すると、ドゥーエは黒い霧のようなものに包まれて消えた。

封鎖領域が消え、周りに人や車などが戻っていた。

ヴィヴィオ「なのはママ」

なのは「・・・ヴィヴィオ」

なのはがヴィヴィオの手を引いて、車に乗り込む。

ヴィヴィオ「ママ・・・その・・・気持ちはわかるけど」

ヴィヴィオが話かけるなか、なのはは無言で車を走らせた。学校とは正反対の方向へ

なのは「ヴィヴィオ・・・ママの話をちゃんと聞いてー！ー」

ー学校ー

アリサ「ん・・・ここ・・・って！！きゃああッ・・・！！」

アリサが目を覚ますとそこは、学校の屋上だった

しかも、吊されていた。

アリサ「なっ、なっ！・・・なによこれー！ー！！」

アリサが叫ぶと、隣でも同じく吊されていたすずかも目を覚ました。

すずか「ええ！！なっ、なに！！？」

二人が吊されているのは、屋上の柵の外である淵。三階なので、ロ
ープが切れたらただじゃすまない。

ドゥーエ「あら、お目覚め・・・？」

淵の近くに座っていたドゥーエが二人を見下ろす。

アリサ「アンタは！！」

ドゥーエ「はあ、うるさい子ね」

すずか「お願いします！助けてください！！」

すずかがドゥーエに言うと、ドゥーエはニコツと笑い

ドゥーエ「い・や・よ」

ウフフと笑った。

それを聞いたアリサは頭に血がのぼり、ドゥーエへ怒鳴る

アリサ「ふざけんじやないわよ！！早く助けなさいよ！！」

アリサが暴れると、吊されていたロープがブラブラ揺れる。

シャキン

ドゥーエは装備していた爪をアリサの顔へ向けた。

アリサ& a m p・すずか「ーッ!!!!」

ドゥーエ「いい加減黙らないと、可愛い顔が傷つくわよ……」

アリサはドゥーエを睨んだ。すずかは怯えながら、アリサを見た。

アリサ「わかったわよ……」

すると、ドゥーエは校門の方へ向いた。

ドゥーエ「ーッ来たわね」

ドゥーエの一言に、二人は校門の方を向いた。

暗くてよく見えない。ドゥーエが立ち上がると

ドゥーエ「貴女達の怖いお友達が」

月明かりで、校門の辺りが照らされた。

そこには、なのはが立っていた。

アリサ& a m p・すずか「なのは(ちゃん)!!」

二人の顔が明るくなった。だが、顔を伏せていてよく表情が見えない

ドゥーエ「よく見ておきなさい……あの子の本性を」

ドゥーエが屋上から飛び降り、グラウンドへ膝をついて着地した。

ドゥーエ「よく来たわね」

なのは「……私が勝ったら、二人は返してもらっわ」

まだ顔を伏せていたなのはの声は恐々しい。

ドゥーエ「ええ、いいわよ」

すると、なのはが顔を上げた。その顔は、今まで誰にも見せたことない表情だ。

なのは「レイジングハート……」

ドゥーエが身構えた。

なのはがバリアジャケットを装着した。

ドゥーエが先に動いた。なのはへ爪を繰り出す

スーン！

刃が風を切り、なのはの顔へ

だが、なのはは首を傾げるだけで爪を避けた。

ドゥーエ「ッ！？」

驚くドゥーエだが、さらに爪を繰り出す

だが、なのはは避けるだけだった

なのは「今度は・・・」

なのはの腕にピンクの円が巻き

なのは「デイベイン・・・バスター」

至近距離での砲撃にドゥーエは防ぐことが出来ず、吹き飛ばされた。

ドォーーン!!!

ドゥーエは、体育館の壁へ叩きつけられ気絶した。

ドゥーエ「・・・・・・・・・・」

アリサ「やった!!」

すずか「なのはちゃん!!」

なのはが二人に向き直り、微笑んだ。

なのは「今降ろすから!」

なのはが一步踏み出した次の瞬間

ドゥーエ「・・・・・・・・」

突如、ドゥーエが立ち上がった。なのはがドゥーエへ振り返った。

なのは「うそ・・・至近距離でデイベインバスターを受けて、立て

るなんて」

ドゥーエ「まだ・・・足りないわ。私は、誰も・・・コロシテナイ」
ベキッ！バキッ！！

ドゥーエの腕、手、胴体から異形なモノが飛び出した。それは、武器でもあり腐った腕でもある

なのは「ーーーーッ！！」

なのはが後退りした。

ドゥーエ「・・・シニナサイ」

彼女が消えた。いや、次の時には目の前にいたのだ

なのは「なっ！？」

ドゥーエの腕に付いた刃物が横に振られた。

レイジングハート《しゃがんで下さい！》

レイジングハートの声で、なのははしゃがみ
その場からはねのけた。

ドゥーエ「オソイオソイオソイ・・・！！」

まただ、またドゥーエの動きが見えなかった。

なのは「速い!!」

なんなの!?この速さ!!

なのははレイジングハートを構え、魔力を収束させる。

なのは「シューーッット!!」

魔力弾5発ほど放ち、動きを操作した。

ドゥーエは魔力弾を避け、狙われないように辺りを移動していた。

なのは「・・・・・・・・・・・・・・・・」

集中して、動きに惑わされず正確に撃ち込む…

魔力を光に乗せて…

なのは「ーーーーそこ!!」

ドゥーエを捉えて、瞬速の魔力弾を撃ち込んだ。

ドスッ、ドスッ!!

ドゥーエが弾かれ、宙を舞った。彼女は空中で体制を整え、着地する

ドゥーエ「へエ・・・コノジョウタイノワタシニアテルナnte・・・

」

声が変わったドゥーエが装備した爪をペロリと舐めた。

なのはがレイジングハートを向ける。体からは白い魔力色を纏っていた。

この色は、彼女が宿しているある“力”の色だ。

なのは「あなた・・・何者？ドゥーエじゃないわよねー！？」

ドゥーエ「ナニモノ？・・・ファハハハハハ・・・！」

彼女が嗤った。片手を眉間にあてながら

ドゥーエ「ワタシハ、ハルカカナタカラノツカイダ」

なのは「遙か彼方からの使い・・・？」

すると、ドゥーエは眉間から片手を離す。

ドゥーエ「モウ・・・コノカラダハモタヌガ・・・ワレラガカミヘノ“イケニエ”ヲササゲル！！」

なのは「生け贄・・・まさか！！」

ドゥーエの爪が伸び、吊されていたアリサとすずかのロープを切断した。

アリサ& a m p・すずか「あっーーーーー」

ロープが切れ、三階から落下し始める。

なのは「アリサちゃん!!すずかちゃん!!」

なのはが叫ぶが間に合うはずがない。

アリサ&a m p・すずか「きゃああっーーーー!!」

叫び声が響いた。ドゥーエがニヤリと嗤うが

???《ソニック・ムーブ》

閃光が、上空から斜めに走った。地面に誰かが着地した。

なのは「えっーーーーー」

???「どうやら間に合った様だな」

ロープに縛られたアリサとすずかの二人を降ろした。

アリサ「あ、あんたはーーーー」

すずか「写真で見たーーーー」

その人物は、エクセルだ。

エクセル「大丈夫か？」

アリサ「えっ、ええ・・・」

「良かった」と言ったエクセルは立ち上がり、ドゥーエへブランド・ティータを向ける。

エクセル「時空管理局執務官のエクセル・アーシュライトだ。No・
2ドゥーエ、殺人未遂の容疑で逮捕する!!」

ドゥーエ「タイホダト? ワラワセルナ・・・!!」

ドゥーエがエクセルへ突っ込み、腕についた刃を振るう。

キンッ!!

ドゥーエ「!？」

ドゥーエは自分の目を疑う。エクセルがブランド・ティータの切っ
先で受けとめたのだ。

エクセル「その程度か・・・」

ブランド・ティータの形態が変化し大剣へとなる。

ドゥーエが後ろへ跳ね退けると、青いバインドがドゥーエを拘束し
た。

ドゥーエ「ナッ!？」

エクセルが大剣を振り上げた。

エクセル「ライトザンバー!!」

エクセルがドゥーエへ大剣を振り下ろし、ドゥーエを高く宙へ飛ば
した。

ドゥーエ「ガッ!!」

エクセル「なのは、今だ!!」

エクセルがなのはに叫ぶと、なのははレイジングハートを構え

なのは「デイベインバスター!!」

ピンクの砲撃が放たれ、ドゥーエへ直撃した。

ドゥーエ「ガアア!!」

ドゥーエが地面に落ちた。すると、ドゥーエから黒い影現れ拡散した。

エクセル& amp・なのは「!!?」

拡散した黒い影は、黒い鳥型の獣の姿へ変化した。

なのは「あれって・・・」

エクセル「ああ、最近騒がれてるやつらだ・・・」

二人は、建物三階建てを余裕で越えている黒い鳥を見た。

アリサ& amp・すずか「なのは（ちゃん）!!」

アリサとすずかが走ってきた。

なのは「二人とも大丈夫!？」

なのはが二人を見て言った。

すずか「大丈夫だけど・・・」

アリサ「どうするのよアレ!? 気持ち悪いの!」

アリサが黒い鳥を指差した。なのはは「大丈夫」と言った。

なのは「あんなのちよいよ(笑)」

エクセル「とりあえず、二人には避難をしてもらう」

なのは「そうだね。でも何処へ？」

すると、エクセルの横に通信画面が表示された。

ソラ 執務官、転送準備完了です

エクセル「了解。」

エクセルはアリサとすずかを見た。

エクセル「二人には、船に避難してもらう」

なのは「ちょっと待って! 二人を船へ避難させるの!？」

エクセル「そうだけど…結界の外よりマシだろ?」

アリサとすずかの足元に転送陣が現れる。

すずか「二人とも、気をつけて」

アリサ「やられたらお仕置きよ!!」

キーン！

二人が転送された。エクセルはなのはへ向き直り

エクセル「さて、終わらせるか（笑）」

なのは「だけど・・・リミッターがあって召喚がー」

エクセルはニコツと笑い、コンソールをいじりボタンを押した。すると、なのはの体が光った

なのは「えっ！リミッター・・・解除!？」

エクセル「クロノ提督から、許可はもらった。ヴィヴィオが連絡くれたおかげで（笑）」

なのははヴィヴィオに、エクセルがフェイトを呼んでくれとは言ったが、リミッターのことは一言も言っていない。きっと、ヴィヴィオなりの気づかいだろう。

なのは「もう・・・じゃあ、下がってて私が終わらせるから」

エクセルは、小学校から離れて黒い鳥を見つめた。

ソラ データは取っています。

エクセル「ああ・・・」

なのはがレイジングハートを地面につけ

なのは「やるよ、レイジングハート!!」

レイジングハート『はい、マスター』

足元に白い陣が形成され、体に白い魔力色を纏う。

なのは「星屑を統べる龍よ、流星になりて来たれ、高町なのはの名のもとに・・・召喚！スターダスト!!」

パリン！

足元の空間が割れ、ヴォルテールに似た白い巨大な龍が現れる。これは、なのはがある試練を達成し、契約した神龍 スターダストである

黒い鳥は、スターダストを見るなり突撃してきた。

なのは「弾いて!!」

スターダストの目が光り、黒い鳥を殴り飛ばした。

黒い鳥「キシヤアア!!」

エクセル「なのは！倒さず封印だ!!」

なのは「了解!!」

スターダストが、黒い鳥を素早い動きで掴んだ。

なのは「リリカルマジカル！封印!!」

レイジングハートからピンクの砲撃が走り、黒い鳥に直撃した。

黒い鳥が咆哮を上げ、球体へと姿を変えレイジングハートへ吸収された。

なのは「封印完了・・・」

エクセル「よくやった・・・・・・・・（笑）」

「軌道上　次元航行艦」

この船は、エクセルが指揮をとる次元艦“プロメテウス”だ

エクセル「悪かった、急に船に連れてきたりして」

エクセルは、アリサとすずかに頭を下げた。

アリサ「ふんっ、とんだ迷惑だわ!」

すずか「まあまあアリサちゃん。でも、助かりました（笑）」

エクセル「なら、いいが・・・」

教導服に着替えてきたなのはがブリッジへ入ってきた。

なのは「失礼します。教導隊所属、高町なのは一等空尉、これよりそちらの指揮下に入ります」

ブリッジにいた局員全員が立ち上がり、なのはへ敬礼した。

アリサ「うわあ〜」

アリサは、その光景を見て驚いた。

すずか「なのはちゃんってかなり偉い人なんだ・・・」

ブリッジを出た4人は、食堂へ向かった。

アリサ「有名人ってのは聞いてたけど・・・まさか、これほどとはね〜」

4人がここまで来るまで、通りかかった局員がなのはを見るなり敬礼していた。

エクセル「なのはは若者達の憧れだもんな」

なのは「エクセルくん、もしかしてこの船にいるのってほとんど新人なの？」

なのはが聞いてきた。それもそうだ
通りかかった局員のほとんど、いや肝心なところ以外は新人がほとんどなのだから

エクセル「ブリッジメンバー以外のほとんどは・・・」

すずか「エクセル・・・さん、私達はいつ帰れるの？」

エクセルがすずか達を見た。本当なら、一般人を管理局の船へ乗せるのは禁じられている。

エクセル「うーん・・・本当なら直ぐ帰せるんだけど、目撃者として局に来てもらう」

なのは「二人を局へ？」

エクセル「そう。クロノ提督に許可をいただいて、帰せるのはそれから」

アリサとすずかは訳がわからぬまま、管理局へ向かうことが決定した

エクセル「そういえば、なのは」

なのは「ん？」

エクセル「封印するときに・・・リリカルなんとかって聞こえたんだが」

その単語を聞いた途端、なのはは真っ赤になり

なのは「そつ、そそそそれは・・・もつ、もう・・・エクセルくんの意地悪く／＼／＼／＼／」

―医務室―

ソラ「はい、体の方には異常はみられません。」

ソラが通信しているのは、片目を眼帯で隠している少女だ。

??? そうか…局に着いたら、私が立ち合おう

通信画面が消えた。医務室のベットには、ドゥーエが寝かされていた。

その後、ドゥーエの体に変化はなく眠り続けていた。

ソラ「こうして見ると…ただの美人なんだけだな」

コンソールをいじるソラ。次の瞬間、ドゥーエの手がソラの腕を掴んだ。

ソラ「!?!」

ドゥーエ「今…私のこと、綺麗って言った? (笑)」

ドゥーエが目を開け、ソラへ微笑んだ。

第1話 始まりは異世界で（後書き）

ー次回予告ー

アリサ「なんで私達が連れていかれなくちゃならないのよー!」

すずか「まあまあアリサちゃん!落ち着いて!」

アリサ「管理局に連れて来られた私とすずか、久しぶりにあったフ
イトやユーノ達なんだけど…」

すずか「これってIDカード?それに私達の顔写真」

アリサ「一般人の私達がなんでこんな目に…!」

すずか「次回 リリカルなのは第2話」

アリサ「入局」

アリサ&すずか「TAKEOFF!」

第2話 入局

ー医務室ー

ソラ「起きてたのか…」

ソラはドゥーエの手を振り払い、身構えた。

ドゥーエ「んゝはぁー」

ドゥーエは起き上がって、体を伸ばした。

ドゥーエ「ええ…あなたが通信してる辺りから」

ソラ「…逃げるのか」

ドゥーエはソラを見てクスリと笑った。

ドゥーエ「いいえ、逃げないわよ…（笑）」

ソラ「…そうか」

ドゥーエの顔を見ていたソラは、感情が揺らいだ。

ドゥーエ「ねえ、私はどうなるのかしら？」

ソラ「局に着いて早々、拘置所行き…」

なんだろ…この気持ち……この人を見ると

ドゥーエ「そう……」

ただの女性に見える……

ー管理局 部屋ー

すずか「話で聞いてたより大きいのね、管理局って」

アリサ「中に街があるのが一番の驚きよ」

二人がいる部屋は、とある人の部屋だ。室内には現在、エクセルとアリサ、すずかしいない。

エクセル「管理局は、次元の中に浮かぶ要塞ともいえる場所だから」

すると、部屋のドアが開き一人の女性が入ってきた

フェイト「アリサ、すずか（笑）」

フェイトだった。久しぶりにあった幼なじみに微笑むフェイトに対して、アリサとすずかが近寄り、わあーわあーと騒いでいた。

???「えと、そろそろいいかい……?」

フェイトの後ろで、頬をかいている男性が二人に言った。

アリサ& a m p ;すずか「はい」

男性がエクセルに向き直った。エクセルは男性に敬礼し

エクセル「お久しぶりです、クロノ提督」

その男性、クロノ・ハラオウンはフェイトの義兄にして管理局提督である。

クロノ「ああ、久しぶりだ。」

クロノがエクセルに微笑み、部屋の中央にあったソファーに腰掛けた。アリサとすずかも腰掛けた。

クロノ「さて、君達の現状なんだが、残念ながら今の状態で帰したらまた襲われる可能性が高いため、管理局で保護する形になった。」

アリサ「保護って…つまり、危ないからここにいろと？」

クロノ「そういうことになる」

アリサとすずかが顔を見合せた。

クロノ「返事はすぐには言わない。ゆっくり考えてくれ」

クロノは立ち上がり、部屋を出て行った。

「フェイトの執務室」

アリサ「変なことになったわね」

すずか「うん」

エクセルとフェイトは二人を見て、頭を悩ませていた。

フェイト「はあ、本当についてない」

はあとため息をついた。

エクセル「まあ、過ぎたことはしょうがない」

すると、エクセルの横に通信画面が表示された

エクセル「ん……ソラ？」

相手はソラだった。

ソラ「執務官、ドゥーエが目覚めました」

エクセル「そうか、じゃあー」

んっとエクセルは奇妙な発言に気が付いた。

エクセル「おいソラ、今ドゥーエのことを名前で呼んだか？」

ソラ「そうですが…?」

ソラは平然とした表情で、エクセルを見た。

エクセル「いや…なんでもない。すぐに行くからその場で待機してくれ」

通信画面を閉じ、今度はエクセルがため息をついてしまった。

フェイト「どうしたの?」

エクセル「ソラがドゥーエの名前を普通に口にした。」

フェイト「普通だと思うけど?」

エクセル「あいつの場合は、普通じゃないんだよ……………」

ー医務室ー

ドゥーエ「ありがとうソラ（笑）」

ソラが差し出したコーヒーを笑って受け取るドゥーエ

ソラ「礼なんてしなくていいよ」

コーヒーを飲むソラとドゥーエ
さっきから一言も喋らない二人。

ドゥーエ「なにか喋ったら…?」

ソラ「話すことはないよ……」

ドゥーエ「さっきからそればかりよ」

ソラ「……すまない、君みたいな美人と話すのは初めてで」

美人という言葉にドゥーエは頬を赤くした。

ドゥーエ「そつ、そつ……／＼／＼」

ソラから顔を背け、コーヒーを飲み尽くす。

ドゥーエ「ごちそうさま／＼／＼」

ー廊下ー

フェイト「バーサーカー……？」

エクセル「2ヶ月前に起こった大量殺人の件は知ってるか？」

エクセルが話しているのは、2ヶ月前に起こった管理世界で起こった大量殺人事件だ。

フェイト「うん。確か、エクセルが担当した事件だね？」

エクセル「その事件の首謀者がバーサーカー、またの名を狂戦士と呼ばれていた男だった。ただの犯罪者と思ってたけど、実際は――」

――2ヶ月前　管理世界――

その頃はちょうど、ソラとエドが配属されたばかりの頃だった。

大量殺人の集団がビルを占拠し、管理局へ金の請求をした。

その首謀者は、バーサーカーと呼ばれており以前から手配されていた。

その事件の緊急の担当者がエクセルだった。その男がロストロギアの強奪の疑いもあったからだ

エクセルとソラ、エドがビルへ突入し集団のほとんどを制圧し、残るは首謀者のみだった。だが、バーサーカーと呼ばれた男をあまくみていた。

バーサーカー「てめえみたいな野郎に俺様が捕まるか――！」

エクセル「諦める……チェックメイトだ」

バーサーカー「ふははははは――！！チェックメイトだと、この俺様が……負けるわけがない――！！！」

男の目が白目になり、目の前から消えた。

エクセル「なっ!?!」

バーサーカー「死ねえええー!?!?!?!」

バーサーカーが刀を振り下ろした。

エクセル「ちっ!」

キンッ!!

エクセルがブランド・ティータを抜く前に、白いバリアジャケットが現れ刀を双剣で受けとめた。

それはー!ー!ー

エクセル「・・・!?!」

バーサーカー「貴様!ー!?!?!」

ソラ「ハッ!?!」

ソラが刀を弾き返し、バーサーカーへ斬り掛かった。その速さはバーサーカーと同等だった。

バーサーカー「その力は!?!」

翻弄される男の懷から紫色の1つの宝石が落ちた。途端に男の動きが鈍くなり、白目が元に戻った。

ソラ「もらった!?!」

ソラの持った片方の双剣が宝石を砕き、そのまま男の腹を貫いた。

グシュツ！

エクセル「なっ！！」

ソラが双剣を引き抜き、エクセルの方を見た。

穏やかな顔が返り血を浴び、まるで殺人鬼を思わせるものになっていた。そして――。

エクセル「――お前」

ソラ「……はい」

エクセルはソラの目を見た途端に全てを悟った。青い瞳は真つ暗な紫へと転じていて、あの男と同等か、それ以上かはわからないがこの青年 ソラは、得体の知れないモノを秘めているのかもしれない

その時の俺は、少なくともそう思っていた。

そして2日後、ソラから事情を聞くことにした

ソラ「自分の家系は、生まれて直ぐある儀式をするんです」

エクセル「儀式…？」

ソラ「はい。自分の家系の先祖は元々、ベルカ王朝の騎士であって“狂戦士団”という騎士団を率いていました。」

エクセル「狂戦士団」…？」

ソラがコクリと頷いた。その後聞いたのは、自分の血にはその狂戦士の血が濃く残っていて、その血を覚醒させるための儀式とソラのデバイスである双剣“ニルヴァーナ”の授与。それ以上の詮索はしなかった

ソラのあの強さが狂戦士の力だとすれば、彼には戦ってほしくない。

エクセル「ソラ、エド……お前達に役割を通達する」

その後、エドを呼んで二人の役割を与えた

エクセル「エド、お前には現場での戦闘専門…そして、ソラには俺の補佐役だ」

ソラ「その役割、慎んでお受けします」

フェイト「そうだったの」

エクセル「それ以来、ソラは自分のデバイスを見せない……けど」

フェイト「けど…？」

エクセル「いずれ、ソラの力が必要な時がくる…そんな感じがする」

ー医務室ー

医務室でドゥーエへの事情聴取することになった。

エクセル「じゃあ、質問いいかな？」

ドゥーエ「どうぞ。」

エクセルとフェイトが順々に、ドゥーエへの事情聴取が始まった。
まずは、ドゥーエ本人かの確認

これは彼女の髪を検査したことで本人と判明

そして、彼女の経歴

次元犯罪者 ジェイル・スカリエッティの元で誕生

聖王教会、ミッドチルダ地上本部への潜入

同地上本部でのレジラス中将の殺害

とそこまでの経歴は良いとして

エクセル「君が宿していたあの黒いのは、何なのか知ってるか…？」

ドゥーエ「さあね、気づいたら生きてたし…あの黒いのは――――
――知らないわ」

フェイト「知らない…？」

ドゥーエ「わからないのよ…体の中で、いつの間にか大きくなって
乗っ取られてた。」

なるほど…あの力は、そういうのだったのか

だとすれば、感染と考えるか取り憑いたと考えるか

プシュー

????「失礼する。」

小柄な銀髪の少女が、医務室に入ってきた。

ドゥーエ「あら お懐かしい顔…」

????「ドゥーエ姉様、お久しぶりです」

その少女の名はチンク・ナカジマ。元ナンバーズで、ドゥーエの妹
にあたる

ドゥーエとチンクが喋っているなか

エクセル『なあ、フェイト…』

フェイト『ん…？』

エクセルとフェイトが思念通話で話しかけある提案をした

エクセル『じゃあ、決定だな』

フェイト『うん』

エクセル「なあ、ドゥーエ。今のお前に聞きたい」

ドゥーエ「えっ………？」

エクセル「今のお前が罪を認めるなら、チンク達と暮らす気はないか？」

ドゥーエ、チンク「!？」

ソラ「しっ、執務官！？何を言ってる……」

ドゥーエ「本当にいいの？」

ソラの口をドゥーエが抑えた

エクセル「ああ、君が罪を認めるならな。それが俺とフェイトでの最終決定だ」

ドゥーエ「……いいわ（笑）」

それから3日間、ドゥーエに対する裁判と短期間教育プログラムが行われ、名前をドゥーエ・ナカジマへ改名した。

そして――――。

「フェイトの執務室」

フェイト「これがIDとミッド語の読み方の本」

フェイトが机の上に2つのIDカードと一冊の本が置かれた。

このIDが誰のかつて？

もちろん、あの二人に決まってる

フェイト「階級は二人同じ、三等陸士。配属は、一応なのはの教導隊かな」

フェイトの前にいるのは陸士制服を着たアリサとすずかが立っていた。

この騒ぎが落ち着くまで、管理局で保護すると同時に管理局への一時入局という形になった。

ミッドに慣れない二人には、なのはのいる教導隊でミッドチルダでの決まり等を習いにいく。もちろん仮配属だけど

アリサ「なかなか慣れない制服ね……」

フエイト「その内慣れるよ（笑）でも良かった。大学の方が研修期間で」

すずか「来年までには落ち着くかな？」

フエイト「それは…わからないけど、どうにかしないと」

ーエクセルの執務室ー

ピッピッピッ……

エクセル「……………」

ピッピッピッピッピッ……

エクセル「出現数が日に日に増えていく一方か…はてさてどうしたものか」

最近の報告書には、特に目立つ所はない

ただ気がかりなのは、この黒い“影”

画面に表示されたのは、異形な形をした影

その形は、人間だったり動物だったり場所によって姿を変えている
エクセル「こういう時、一番深く考えるのは……アイツしかいないかな」

エクセルは自分のデバイスを取り出し

「もしこれが始まりに過ぎなかったら……俺は……それをただ防ぐ……
それがこの剣を受け継いだ使命なのかな」

ーミッドチルダ海上ー

調査隊旗艦 ヴォルフラム

同 司令部

「……」

肩までセミロングヘアの女性は、司令室中に表示された画面を見渡していた。

すると、司令室のドアが開いた。

入ってきたのは銀髪の女性、目の色は真っ赤

その女性は、持っていた資料を片手で持ちながら
画面を見渡していた女性に声をかけた

「失礼します司令。記者会見のお時間なので、お支度をー
ー」

「うん。わかってるよ、ちょうど見終わったところや」

画面を消し、ヴォルフラムの司令で元機動六課部隊長である 八神
はやては、入ってきた女性に振り返った。

コートを着て、一緒に司令室を出る

はやて「やっぱり秘書官にピッタリやなリインフォース（笑）」

リインフォース「ありがとうございます。司令…いえ、我が主」

廊下を歩きながら、何気ない会話をしていた

はやては、今騒がせている事件に関して
心の中で、ひそかに計画を練っていた

第2話 入局（後書き）

―次回予告―

なのは「アリサちゃん達がミッドに暮らしはじめて3日。大変な毎日だけど、しょうがないよね（笑）」
さて、黒い獣を追い求めて管理世界を行き来するエクセル達、やっぱり簡単にはいかないみたいだね

次回 敵？

TAKE OFF!!」

第3話 敵？

―第2管理世界―

燃え盛る港で、少女は一生懸命走っていた。

少女「ハア、ハア、ハア！！」

その後ろから数匹の黒い獣が少女を追い掛けていた。
少女は倉庫を曲がり、裏へ入っていく

黒い獣「シャアアア！！」

黒い獣が倉庫の屋根を飛び、少女の前へ回り込んだ。

少女は、立ち止まり来た道に戻ろうとした。

だが、後ろからきた黒い獣に挟まれてしまった。

少女「い、いやぁ……」

黒い獣が少女を追い詰めていき、少女は壁に背中をつけた。

黒い獣が少女へ襲い掛かろうとした瞬間

タタタッ！！

倉庫の屋根から誰かが飛び降りてきた。手に持っていた銃から魔力弾が放たれ、襲い掛かろうとした獣に数発撃ち込んだ。

撃たれた獣は地面にめり込み、降りてきた人物はその近くにいたもう一匹の頭を踏んで着地した。

黒い獣「キシヤー!!」

???「遅いッ…!!」

その人物の声は女性のもだった。声は辺りに響きわたり、走ってきた一匹にオレンジ色の魔力弾を食らわせ
後ろからきたもう一匹にも撃ち込み、その場にいた黒い獣は全滅した。

???「ふう…」

女性は少女へ近寄り、手を差し出した。

???「もう大丈夫よ。さあ、一緒に避難しよう」

少女は差し出された手を握ろうとした

瞬間————

黒い獣「シャアア!!」

一番最初に倒した黒い獣が女性へ飛び掛かった。

だが、それより速く女性の体が反応し
銃がナイフへと変形し、黒い獣の胴体を斬り裂いた。

???「大人しく寝てなさい…」

少女を抱き抱え、女性は通信画面を開いた

???「こちらランスター執務官、少女一名を救出しました」

医療班 了解。2分で救護ヘリを回します

2分後、救護ヘリに少女を乗せた。

少女「ありがとう、お姉ちゃん（笑）」

???「うん（笑）もう大丈夫だから、安心して」

少女「うん！」

ヘリが上昇していく。

残った女性は風で揺れたオレンジ色のロングヘアを抑えた。

彼女の名前は、ティアナ・ランスター。

元機動六課のFWメンバーであり、脱獄したジェイル・スカリエツ
ティを逮捕したことで一流の執務官になった彼女もあの黒い影を追
っていた。

ティアナ「ここもボスみたいな奴はいないみたいね…エクセルから
報告があつた黒い影は人に取り憑くみたいなさ…本当なのかしら」

ー翌日 ミッドチルダー

同 高町家

キャスター 第2世界で起こった火災の原因は、未だわかっておらず管理局調査部の方では――

朝のニュースを見ていたヴィヴィオは、パンをかじる。

なのは「ヴィヴィオ、早くしないと間に合わないよ」

食器を片付けていたなのは。その隣には、アリサとすずかがてきぱきと片付けを手伝っていた。

アリサとすずかは、入局の間はなのはの家で暮らすことになっていた。

ヴィヴィオ「はぁい。モグモグ――」

記者A では、調査隊司令の八神はやて一佐にお話を伺いたいと思います

はやて、という名前に反応した一同はテレビを見た。

はやて 調査隊司令の八神はやてです。

はやての隣には、リインフォースが座っていた。

記者A 最近こういう事件が多発していますが、司令としてのお考えは…？

はやて そのことに関しては、まだ何とも言えません。日が経つに

つれ、数が増えていく一方でこちらとしても、現地局員との連携が必要なのです

はやての冷静な眼差しが、カメラを射ぬいていた。

記者B では、これからの対策は

はやて 私としての考えはありますが、まだ時期ではないと言っておきます。

記者C 時期とは？

リインフォース これ以上のお話は、口外出来ません。

アリサ「はやても大変ね」

なのは「しょうがないよ、司令なんだから」

全員が家を出て、それぞれの場所へ向かう。

ヴィヴィオは学校

なのは、アリサ、すずかは部隊へ

なのは「じゃあ、ヴィヴィオーーー」

ヴィヴィオ「うん」

分かれ道で親子二人はお互いの手を叩き、別れた。

学校へ向かうヴィヴィオの後ろを同世代と思わせる格好をした人が

走って行った。

―St・(ザンクト)ヒルデ魔法学院―

初等科・中等科棟

学生達が校舎へ歩いて行く中にヴィヴィオの姿があった。

ヴィヴィオ「あつ、アインハルトさぁ〜ん」

ヴィヴィオが声をかけたのはツインテールでエメラルドグリーンの髪をした少女のアインハルト・ストラトス。

アインハルト「ヴィヴィオさん……………」

アインハルトが振り返った。一年前、ヴィヴィオとアインハルトはとあることがきっかけで知り合った少女だ。

実は彼女とヴィヴィオには断ち切れない因縁がある。よく見れば、アインハルトはヴィヴィオと同じく両目の色が違うのだ

ヴィヴィオ「おはようございます」

アインハルト「おはよう。皆さんは元気…?」

ヴィヴィオ「はい、ママ達は忙しいんですが元気です（笑）」

ヴィヴィオがにこやかに微笑んだ。アインハルトは薄く笑い、二人で校舎へ入って行く

半年前の事件にアインハルトが出てこなかったのは、別世界へ行っていたからだ。

アインハルト「では、また放課後に」

ヴィヴィオ「はい」

小中違う校舎の為、別れる二人

???「聖王と覇王が一緒にいるなんて、笑える光景――」

――教室――

ヴィヴィオ「おはよう。リオ、コロナ」

教室に入ったヴィヴィオは、親友である二人に挨拶した。

リオ「おはよう!」

コロナ「ごきげんようヴィヴィオ」

ツインテールの髪型がコロナ、短髪の子がリオ

この3人は、幼い頃のなのはやアリサとすずかを思わせるほどの仲だ。

先生「転校生を紹介します。」

教室に金髪のセミロングヘアーの少女が入ってきた。

サラ「サラ・ミスズです。よろしくお願いします」

先生「サラさんは、病弱ですので皆さん、いたわってください」

とりあえず、自己紹介を終えヴィヴィオを先頭にサラへ詰め寄った。

ヴィヴィオ「サラさん、高町ヴィヴィオです！友達になりましょう
！！」

サラの慌てふためく姿を見て楽しかったのか、ぐいぐい詰め寄ってきてサラの手を握ったヴィヴィオ

赤くなりながら、サラとヴィヴィオの目が合った。

ツキンッ！

サラ「ーーーーー」

ヴィヴィオ「ーーーーー！？」

ヴィヴィオは手を離れた。次のクラスメートが話し掛けた

ヴィヴィオは横からサラを見た。胸元を触るヴィヴィオを見たりオとコロナは

リオ「どうしたの…？」

ヴィヴィオ「……………」

コロナ「ヴィヴィオ…？」

ヴィヴィオは胸元を抑えたままだった。

ヴィヴィオは、胸の中で締め付ける痛みを気にしていた。

―魔法学院 校門―

……………昼頃

エクセル「ここが…ヴィヴィオのいる学校か」

私服のエクセルは校門をくぐり、校舎へ入っていく

先生「すみませんが、どちら様ですか？」

職員室で先生に素性を聞かれ、エクセルは執務官カードを見せて

エクセル「時空管理局執務官のエクセル・アーシュライトです。高町ヴィヴィオさんにお会いたいのですが」

―数分後―

ヴィヴィオ「ごきげんよう、エクセルさん」

エクセル「ごきげんようヴィヴィオ。」

ヴィヴィオの後ろにリオとコロナがいた。

リオ&コロナ「こんにちは〜（笑）」

エクセル「こんにちは（笑）」

場所を移動して、図書室へ

エクセル「ヴィヴィオの権利で無限書庫のデータを俺の端末へ送ってほしいんだ」

ヴィヴィオ「構いませんが、何のデータを――」

エクセル「古代ベルカ時代を含め悪霊、憑依の事件と記録辺りかな」

その二つの単語を聞いた3人は一瞬だけ後退りした

エクセル「あつ、いや、決して変な意味はないからな」

ヴィヴィオ「はっ、はい……」

ヴィヴィオが端末を開いて文字を打っていく

ヴィヴィオ「司書名、高町ヴィヴィオ。認識コード8781、検索ワードーーーーー」

エクセル「おつ、きたきた。ありがとうヴィヴィオ」

ヴィヴィオ「いえいえ」

ー放課後ー

放課後までいたエクセルは、ヴィヴィオ達を車に乗せた。

アインハルト「すみません、私まで」

助手席に乗ったアインハルト。

エクセル「構わないよ。通り道だし…君とも話してみたかったから、ヴィヴィオが好きな友達のことをさ」

ヴィヴィオ「え、エクセルさん!!」

赤くなるヴィヴィオを笑いながらエンジンをかけ、車を走らせ学校から離れていく

エクセル「ヴィヴィオ…本当にここでいいのか？」

リオとコロナを送った後、残るヴィヴィオとアインハルトを送るだけなのだったのだから、ヴィヴィオは用事があるだとかで途中で降ろ

すことになった

ヴィヴィオ「大丈夫です。家も近いですし、大した用事じゃないですから」

ヴィヴィオがドアを閉め、アインハルトを見た

ヴィヴィオ「じゃあアインハルトさん、また明日」

アインハルト「また明日…」

車がヴィヴィオから離れていく

ヴィヴィオ「さて……………」

ースポーツ公園ー

ヴィヴィオ「ふう…」

大人モードで魔法の練習していたヴィヴィオ

ヴィヴィオ「ねえ、クリス…収束系の練習してみようか」

ビシッと手を上げたクリス。ヴィヴィオが砲撃陣を展開し目を閉じる。

収束魔法…なのはママと戦った時に無意識に使ったけど、今はどうなんだろう

ヴィヴィオ「ハアアアア……………!!」

虹色の魔力光が収束していく

すると突然――――

???「古代ベルカ聖王オリヴィエの末裔、高町ヴィヴィオとお見受けします。」

ヴィヴィオ「!!?」

虹色の魔力光が消え、ヴィヴィオは振り返った。

電柱の上にバリアジャケットを装着し、バイザーをかけた女性が立っていた。

ヴィヴィオ「誰ですか…?」

???「倒される人には名乗らないのが私の主義です…」

するといきなり、女性が消えヴィヴィオの懷に現れた。

ヴィヴィオ「あッ――!!」

女性の拳がヴィヴィオに向かっていく

ガシッ!

ヴィヴィオは女性の拳を弾き、ステップを取りながら後方へ下がった。

ヴィヴィオ「いきなり何をー」

シュツ

また相手が一瞬で間合いに入ってきた。さすがに今度はヴィヴィオも反撃が出来た。自分が得意なカウンターだ

ヴィヴィオ「リボルバースパイク!!」

ヴィヴィオの上段回し蹴りが相手の顔を捉えバイザーを弾いた。

???「ッ…!」

相手の驚くのがわかった。ヴィヴィオは距離を離し、バリアジャケットを装着した。

バイザーが外れ、素顔が見えた。月の光に照らされた相手の顔は、どこかのお嬢様を思わせる顔立ちで髪は金、目は自分と同じドットアイ。

???「…………許さない」

女性は傷がついた左頬を撫でると、周りの雰囲気が一変した。

黒い影が地面をおおい、五体の黒いピエロが片足に、片腕に剣をつけて現れた。

ヴィヴィオ「!!!」

???「私の顔に傷をつけたことを後悔させてやる!!」

女性の怒号で、黒いピエロがヴィヴィオへ斬り掛かった。

ドンー!!

ヴィヴィオはそれを避け、後ろから来たピエロを殴り飛ばす。

黒いピエロ「キエエエエー!!」

ピエロが吹き飛び、ヴィヴィオは別のピエロと対峙した。

ヴィヴィオ「アアアアア……ッ!!」

避けたピエロの剣を掴み、他のピエロを弾き飛ばし掴んでいたピエロを投げる。

ヴィヴィオ「残ったのは……」

ヴィヴィオは後ろにいた女性へ振り返り、身構えた。

???「……やっぱり、雑魚がいくら掛かっても無駄なことね」

女性は懐を探り、銀色の何かを取り出した。

???「……ヴァルフ」

そう女性が口にすると、黒い光が女性を包み手足に銀色の鉄鋼のパーツを装備した。

ヴィヴィオは目を疑いつつも、構えを解かなかった。

「このヴォルフは、ビルをも砕く……」

女性が腕をくねらせた。ヴィヴィオにはその動きが攻撃の合図と悟り、両腕に魔力を込めた。

「遅い!!」

女性の動きが先程より遙かに速かった。

驚愕したヴィヴィオの下から突然、拳が現れ顎に食らった。

ヴィヴィオ「ガッ……!!!!」

体が宙を飛び、とてもない痛みがヴィヴィオを襲った。宙を舞ったヴィヴィオの上に女性が跳躍し右腕を振り上げた。

「獄王流」

右腕に装備された鉄鋼のパーツが黒く輝き、ヴィヴィオへ振り下ろされた

「……獄門拳」

振り下ろされた拳がヴィヴィオの胴体へ食い込み、そのまま地面へ物凄い勢いで叩きつけられた。

ダアアアアーン!!

地面に薄いクレーターが出来た。ヴィヴィオは頭と口から血を流し、

クレーターの中心で横たわっていた。

女性は、装備していた銀色のパーツを消し、ヴィヴィオに背を向けて公園を出ていった。

ーアインハルトの家ー

時間帯は19時を回っていた。

サアアアアア

シャワーを浴びていたアインハルト。

アインハルト「ふう……………」

浴室から出て、タオルを取ったアインハルトへ

ズキッン！！

アインハルト「…ッ！？」

急に襲った胸の痛みに、アインハルトは膝をついた。

アインハルト「な…にッ……………」

ふらふらと立ち上がり、タオルで体をふいた。そんな彼女に近寄る小さなぬいぐるみ（猫みたいな豹）のデバイス、アステイオン。愛称 ティオは鳴きながらアインハルトに近づく

ベッドの近くまで来ると、胸の痛みの理由がわかった。

アインハルト「通信……？」

発信者はヴィヴィオだった。アインハルトは嫌な予感と感じながら通話のボタンを押した

画面が表示され、ヴィヴィオが映った。

アインハルト「ヴィヴィオさん……！？」

アインハルトは大人モードのヴィヴィオの顔を見て驚いた。それもそうだ、映し出された顔は口と頭から血が出ていたのだから

ヴィヴィオ すみ……ませ……ん。急いで…… スポー……ッ……公園まで…… 来てくれ……ますか

かすれかすれの声で、アインハルトに場所と状態を伝えた。

アインハルトは急いで服を着替え、ティオと一緒に家を飛び出した

ー スポーッ公園ー

アインハルト「ハア……ハア……ハア……！！」

ここまで全力疾走してきたせいか、息継ぎがづらい

公園に入り、辺りを見渡すとティオが小さな穴を見つけた。
クレーター

中心には、大人モードが解けていたヴィヴィオがいた。

アインハルト「ヴィヴィオさん…！」

ヴィヴィオを背負って、ベンチに横たわせる。

アインハルト「ひどい……………」

顎、腹部への強力な打撃とクレーターができるほどの強い破壊力。
アインハルトは聞かされたことを総合して考えながら、ヴィヴィオを見て救急車を呼んだ。

―病院―

治療室で治療中のヴィヴィオ。部屋の前には、なのは、アインハルト、エクセルがいた。

エクセル「すまない、俺があの時……………」

なのは「ううん。気にしないで……」

アインハルト「……………」

アインハルトは考え事をしていた。

ヴィヴィオのバリアジャケットを貫通するのは、自分はもちろん母親のなのも簡単には出来ない。そもそも、自分の武装化とヴィヴィオのバリアジャケットは大いに違う所がある

ヴィヴィオのバリアジャケットは、今は失われた古代ベルカの聖王オリヴィエが使用していた防御特有スキル『聖王の鎧』と現代の技術を融合して作ったもの

それを無視して、ヴィヴィオの体へダメージを与える。

アインハルト「ーーーーーそんなことって」

ー1時間後ー

ヴィヴィオ「ママ、本当に…ごめんなさい」

治療室から出て、移動用のベッドに横になっていたヴィヴィオは頭に包帯を巻かれたヴィヴィオはなのはに謝った。医師によると、顎へのダメージはそれほどでもないのだが、体へのダメージは歩けないまでに達していて、集中して治療すれば全治1週間だそうだ。

なのは「ヴィヴィオが無事なら、許してあげるよ（笑）」

ー病室ー

エクセル「ヴィヴィオ、襲ってきた相手はどんな奴だった？」

ヴィヴィオは頬に指をあて

ヴィヴィオ「えっと…女の人で私の大人モードくらいの身長で、髪の色は金髪、顔立ちはお嬢様みたいでした」

ふむふむつと顎に手をあてるエクセル。

エクセル「他にあるか……？変わった様子とか」

ヴィヴィオ「私のこと良く知ってたみたいだし、なんか黒い影からピエロが出てきたり……」

エクセル& a m p ;なのは「!？」

エクセル『なのは……』

なのは『うん……』

二人は部屋を出て、屋上で通信をしていた。

はやて ヴィヴィオが接触した人物は、事件の関係者と考えるのが妥当やろうね

エクセル「あれが人の仕業……か」

なのは「そうだね。」

はやて ……………じゃあ、そろそろ奇跡の部隊カードが必要な時かな
（笑）

エクセル「奇跡の部隊カード？……………はやて、まさか——」

はやて 人の仕業とわかれば、管理局側が手を打つやろうけど、まだ謎が多い敵とまともに戦えるのはウチらだけや……なのはちゃん、エクセルくん……新しい戦いの火種にならんよう、頑張っていこう！

第3話 敵？（後書き）

ー次回予告ー

はやて「さあさあ、次回予告いくよ」

はやて「ヴィヴィオが襲われて三日。場所は変わって、辺境世界へエリオ、キャロがいる部隊へフェイトちゃんが赴いてーーーすると、そこに変な男の人がーーー」

作者「変な次回予告するなーー！！

次回 森林の誘惑者」

はやて「誘惑者やて！？まさかエクセルくんかー！！」

エクセル「そんなわけあるかーーー！！」

第4話 森林の誘惑者（前書き）

エクセル「まだ全員を集めるには無理だ。まずは隊長陣を集めた方が手っ取り早い」

エクセルの言葉で、はやてから奇跡の部隊カード

「六課」のカードが上げられた。

再び、機動六課の出番がやってきた

最強で奇跡の部隊である「機動六課」改め特務部隊「特務六課」の新設立

時はまだ――――――

第4話 森林の誘惑者

ーミッドチルダ市街地ー

午前8時

スバルの住むマンション

ピンポーン

部屋の前で、呼び鈴を鳴らしていたティアナ

ピンポーンピンポーン

だが、何度鳴らしても彼女の声が聞こえない

ティアナ「いないのかしら…」

クロスミラージュ《いえ、マツハキャリバーが室内で反応してくれました。鍵は空いています》

ガチャッ！

ティアナはドアを開けた。

ティアナ「スバル… 入るわよ？」

ヒールを脱ぎ、部屋へ踏み出した瞬間

シュルツ

ティアナは何かを踏んで、足を滑らせた。

ティアナ「ふぁつとと！…なに、これ？」

ティアナは踏んだものを拾った。それは薄い布だった

ティアナ「……って下着じゃない」

室内が暗いせえか、ちつとも気づかなかった

ティアナ「スバル…？」

部屋が真っ暗だ、カーテンも開けてない。

ティアナ「カーテンも開けないで、だらしない…」

シュン

カーテンを開け、振り替えると床には

ティアナ「い…いやぁー！…！！」

ティアナの絶叫がマンション中に響き渡った。

それもそうだ。ソファアの近くでスバルが目を開けたまま倒れていたのだから

ティアナ「スツ…スバル？ねえ……嘘でしょ！？」

ティアナがスバルを擦った。もちろん反応がない

ティアナ「スバル！スバル！！起きなさいよスバル！！！」

涙目になったティアナがスバルの耳の近くで叫んだ。すると――

スバル「んう………」

ティアナ「え………？」

スバルが目を擦りながらムクリと起き上がった。

ティアナ「ス……スバル……？」

スバル「あれえ……ティア？……ふあ……はあ……」

スバルが大きなあくびをした。

スバル「ゴメ……ン。2日間連続で働き詰めだったからか、寝てないんだよ……」

スバルは目を擦った。半分しか開いていない瞼が再び閉じようとしていた

ティアナ「……………」

スバル「……………」

ぶるぶる震えていたティアナは、持っていたバックを床に落とし

「脅かすんじゃないわ……よー！ー！！」

バシーーーーン！！

スバルの頬におもいつきり振りかぶった強烈なビンタを食らわせた。

スバル「ふわっ……！！？」

スバルは完全に両目を開け、涙目で赤くなった頬を触れながら「なんで打つの？」という目でティアナを見た。ティアナは我慢出来なかったのか

ティアナ「大体鍵は開いてるわ、下着は脱ぎっぱなし！！」

ベシベシベシベシ……！！

さらに多くの往復ビンタで、スバルの頬を叩きまくるティアナ

ティアナ「おまけに目を開けながら寝てればッ……！！」

最後には大きく振りかぶり

ティアナ「誰だって驚くわよーーーー！！！！」

ベシーーーーン！！

トドメのビンタで、スバルは床に倒れた。

スバル「……ごめんなふぁーい（泣）」

床で泣きながら謝罪するスバルであつた。

ティアナから制裁を食らい、完璧に目が覚めたスバルは腫れた頬を氷で冷やししながら、六課のカードが上がったことを聞かされた。

スバル「じゃあ、また隊舎に集合するの…？」

ティアナ「今回ばかりは隊舎は使えないから、主に航行艦がメインね」

スバル「じゃあ私とエリオとキャラがティアの航行艦に乗るってことだね」

ティアナ「まだわからないけど、今頃フェイトさんが二人を迎えに行ってる所よ」

「その頃、フェイトは」

フェイト「クシュン…！」

草原でくしゃみをしたフェイトは、キャラとエリオがいる隊の場所へ着く所であつた。

フェイト「誰か私の噂してるのかな…？」

と言っている内に、フェイトの体に大きな影が被つた。フェイトは空を見上げると、そこには――――

????「フェイトさぁん」

大きな飛竜だ。その背中から可愛らしい女の子の声が聞こえた。

フェイトは見知った飛竜と背中に乗っていた声の主に微笑んだ。

フェイト「キャロ」

???「フリード、フェイトさんの所に降りよう」

飛竜がフェイトの所へ降りて行く。翼をはたかせ、フェイトの前で足をつく飛竜。フリードの背中から、ピンクの髪をした小柄な少女が降りて、フェイトに駆け寄ってきた。

フェイト「キャロ、元気だった？」

この少女の名前はキャロ・ロ・ルシエ。フェイトの大切な家族の一人で、フリードはキャロが使役する飛竜であり、キャロの生れ故郷を守護する飛竜の一頭である。

フェイトに頭を撫でられるキャロは

キャロ「はい！私もロッジにいるエリオくんや皆さんも元気です（笑）」

フェイト「良かった」

ー環境保護隊　ロッジー

エリオ「フェイトさん、そんなに撫でないでください／／／／／／／」

フェイト「あはは（笑）ゴメンね、キャラが妬いちゃうね（笑）」

フェイトがからかうと、環境保護隊の面々が笑っていた。

キャラが赤くなりながら、あたふたと

キャラ「やつやつ、妬きませんよう！？／／／／／／／／／／」

フェイト「じゃあ二人共、ヨロシクね」

二人に事情を説明し、二人は直ぐにOKしてくれ、フェイトは少しだけ安堵した。

フェイト「今日は泊まっていく予定だったんだけど、いいかな？」

夕食を一緒に済ませ、キャラが保護隊の隊長に聞いてみると

隊長「別に構いませんよ。ウチのチーム二人が良いっていうなら」

フェイト「すみません。」

その後、三人でティータイムをとっていると

ピーピー！

三人「！？」

隊長「何者かがセンサーに引っ掛かった」

パットを操作しながら、場所を表示した。

森林の奥深い所だった。

キャロ「エリオくん！」

エリオ「うん！」

二人が外に出て、バリアジャケットを装着する

フェイト「二人共、気をつけて！」

二人「はいッ！」

エリオとキャロが大きくなったフリードに乗って空に上がっていく。
月に照らされ、フェイトはバルディッシュを取り出す

隊員（女）「執務官！センサーに複数の反応が！！」

フェイト「監視サーチャーの映像を私に！二人を手助けします！！」
バリアジャケットを装着しバルディッシュを片手に空へ舞い上がった。

「……」

暗い森林の中で、そいつは歩いていた。

その上空にフリードが到着した。

そいつは、フリードを見上げる。

「……アルザスの飛竜……」

声は男の者だった。男は一瞬だけ笑った。

キャロ「止まりなさい！ここは保護区域に指定されてます！部外者は立ち去ってください！！」

キャロがフリードから通告すると、男の周りに小さな黒い竜が三体出現する

男「さあ……」

男が「襲え」と言おうとすると、森林の中から

エリオ「ハアアアア！！」

ザシュザシュ！

ストラダを持ったエリオが現れ、瞬時に三体の黒い竜を両断し男に矛先を向けた

男は一瞬だけ驚いた表情をするが直ぐに元の表情に戻る

男「ほお…」

エリオ「保護区域への不法侵入、及び現地保護隊に対する攻撃行為は犯罪です。よって、あなたを逮捕します！」

男「立派なものだな、エリオ・モンディアル」

エリオ「！？（こいつ、なんで僕の名前を…）」

男「なんで、僕の名前を…か？」

男はエリオの思っていたことを口にした。エリオはさらに警戒した

男「お前はまだ、自分の立場をわかっていないようだな」

エリオ「……どういう」

すると、エリオの周りから先程の黒い竜が六体が現れ、上空のフリードに向かっていく。

エリオ「キャロ…！」

エリオの目線が男からキャロへと移った。

キャロ「フリード…！」

フリードが上昇し、黒い竜から距離を離そうと移動する

エリオ「……お前…！」

エリオが振り返ると、男がエリオに剣を振り下ろそうとしていた。

キンッ！

振り下ろした剣をストラダで受け止める。

男「面白いな……いい反応をしている。だが……」

男はストラダを弾き、エリオを蹴り飛ばす。

エリオ「あまく……！」

蹴り飛ばされたエリオは後ろにあった木を軸に、ストラダのブースターを使い、再び男に突撃する

エリオ「見るな……ッ……！」

カートリッジをロードし、エリオとストラダがさらにスピードを上げる。

エリオ「スピーアングリフ……！」

ブースターによる突撃攻撃が、男に迫る。だが……

キンッ……！

エリオ「なっ……！？」

男は持っていた剣で、エリオの突撃攻撃を易々と受け止めたのだ。

男「その程度か……」

エリオ「（動かない！？）」

宙に浮いた状態で、エリオは動けなかった。

男「では…終わりにしよう……」

男の左手に突然、槍が現れる。

男「さあ…己の運命に絶望しろ」

男が、エリオに槍を突き刺そうと左手を動かした。

そして、そこへ金色の稲妻が走った。

???「動かないで」

金色の鎌の刃が、男の首筋を捉えていた。

エリオ「フェイトさん…!!」

エリオの足が地面につき、今度は逆に男が動けなかった。

男「……キミかい…フェイト・テストロッサ。まさかこんなに大きくなっていたとは」

男はまるで、フェイトを知っているかのような口調で、後ろにいるフェイトに問う。

フェイト「あなたが何者かは知りません…でも、私の家族に手を出したことは許しません」

男「フフフフ、笑わせてくれるじゃないか…だけど、いいのかな？自分のことは心配しなくて……」

フェイトの後ろに黒い小さな竜が現れ、フェイトを襲おうと牙を向いた

バルディツシュ《ソニックムーブ》

フェイトは竜の後ろに高速移動し、バルディツシュを振るった。

フェイト「ハアッ！」

竜を斬り裂き、地面に着地する。だが、斬り裂いた竜の体がバインドとなり、フェイトの体は近くにあった木へ拘束した。

フェイト「あっ！？」

気づいたら、エリオもバインドで抑えられていた。

男「あつけないな、雷の女神様がこの程度では…」

男はフェイトに近づき、彼女の顎をクイツと手で上げる。その顔はやはり良く見えずにいた。

男「キミはやはり美しい…美貌とその内に宿した力も変化がない。だが、自分の運命を知らない…そんなお前を再びものにしたい」

フェイト「なっ、なにを言って!?!」

男はフェイトの腹の辺りに触れり、擦った。

男「だが、さすがにまだ身籠っていないか……また会おう」

男はフェイトから離れ、足元に転送陣が現れる

男「俺の名前はアルザス……この名前を魂に刻み込んでおけ……そして次はもうないと思え」

男は光に包まれた。

フェイト「アルザス……」

一体何者……?私を知ってたみたいだけど……それに、身籠ってないって

フェイトはお腹に触る

まさか……ね

時を同じくして、ミッドチルダの病院にあるヴィヴィオの部屋では、コロナ、リオ、何故か他の人達がヴィヴィオの見舞いに来ていた。

リオ「これが今日勉強した分のノートのコピーと頼まれてた本……」

リオがヴィヴィオの前にあったテーブルにドサツと紙の山を置いた。
ヴィヴィオ「うゝん…なんか多くないかなあゝ（汗）」

コロナ「大丈夫だよ。はい、本」

あれから起き上がれるようになったヴィヴィオは、リオとコロナに頼んで授業のノートを取ってきてもらったのだ

???「しかし、ヴィヴィオを襲った奴はヴィヴィオの素性を知ってたみたいじゃねえーか」

ヴィヴィオのストライクアーツの師匠であり、N2Rのアタッカーであるノーヴェはヴィヴィオに聞いた

ヴィヴィオ「知ってたというか…なんというか」

ヴィヴィオは渡された本のページをクリスがめくっていく

ヴィヴィオ「不思議な感覚がした。私というより、私の中に眠ってる血…みたいなのが」

ノーヴェ「なあゝに暗い顔してんだよ、友達の前で（笑）」

苦笑したノーヴェがヴィヴィオの額に軽くデコピンした。

ヴィヴィオ「にやつ!? もうノーヴェ!」

すると、クリスがちょこちょこヴィヴィオを突いた。

ヴィヴィオ「ん？クリス、見つけたの？」

クリスがコクンツと頷き、ヴィヴィオとノーヴェ達は本を覗き込んだ。

この本は『王朝 家系書』というタイトルである。これは元々、無限書庫の禁書の棚にあった本なのだが、ヴィヴィオがユーノに無理矢理頼んで特別に借りたのである。

開かれたページには、聖王の名と霸王の名を初めとする様々な王家の王の事や名前や家系図が載っていた。

ヴィヴィオは自分を襲ったメルフィスという人物が聖王と関係している予想した

ヴィヴィオ「え」と…あつた！…えっーーーーー」

ヴィヴィオは自分の目を疑った。あの女の人がいたメルフィスという名前、それは

メルフィス・ヴァンワール

それがメルフィス家の一代目の女の名前だった

そして、その彼女も王の名を受け継ぐ者だった

その名は『魔王』

ノーヴェ「メルフィス・ヴァンワール…魔王と呼ばれた王か」

ヴィヴィオ「ねえ、リオ、コロナ…アインハルトさんは？」

コロナ「アインハルトさんなら、用事があるからって……」

ヴィヴィオ「！？…ダメツ…アインハルトさんは……」

メルフィスに会っちゃダメと言えなかった。ヴィヴィオは本能的に感じたのだ、アインハルトは自分を倒した相手に会うことを

―その夜―

アインハルトは制服のままスポーツ公園のベンチに座っていた。アインハルトは目を閉じ、バックを横に置いていた。

アインハルト「……………」

公園には珍しく人がいる気配なくただ、アインハルトだけが存在を許されているようだった。

噴水の音がアインハルトの耳に響いてきた。

すると突然……

バイザーをかけたメルフィスがいきなり背後から飛び掛かってきたのだ

ズバアアアン！！

メルフィス「なっ！？」

メルフィスは驚いた。ベンチに座っていたアインハルトが、いつの間にか置いていたバックを片手に、噴水の傍らに立っていた。

アインハルト「あなたですか、メルフィスという人は…」

メルフィス「さすがね霸王。私の気配を感じ取るなんて…」

バイザーを取り、後ろに投げ捨てるメルフィスはゆっくりと構えた。

アインハルト「あなたがヴィヴィオさんを狙った理由…吐いてもらいます」

アインハルトは持っていたバックを横に放り投げ、足元に魔法陣がひかれる

アインハルト「いきますよティオ！」

ティオ「にやっ！」

肩になっていたティオが鳴いた

アインハルト「セット・アップ!!」

アインハルトが魔力光に包まれる

魔力光が治まると、アインハルトはヴィヴィオと同じ大人モード、本人は元々武装形態と呼んでいるがこれが彼女の大人モードであり霸王の象徴である。デバイスを持っている今では色々変わった

アインハルト「……勝負です」

アインハルトが構えた。二人は見合い、どちらが仕掛けるか待っていた。

二人「……………」

ザアアアッ！

風が吹いた。

メルフィス「……………！！」

アインハルト「……………！！」

二人が同時に動いた。メルフィスの左から来る拳をアインハルトは右腕で弾いた

上手く近付けば、一撃で、断空拳で仕留める！

スタンッ！

メルフィス「……………ッ！！」

アインハルトの連撃を弾き、彼女もまたメルフィスの拳打を弾いていた。

アインハルト「ハッ……！！」

アインハルトの拳打がメルフィスを吹き飛ばした。

メルフィス「ぐっーーーーー!!」

吹き飛んだメルフィスは、電柱に叩きつけられた

アインハルト「ハア…ハア…私のカイザーアーツにはあなたの拳で勝つのは不可能です」

アインハルトの言葉にメルフィスは、肩を震わせた。メルフィスは立ち上がり

メルフィス「霸王が私に勝つと……なら、これに勝てるかしら」

メルフィスが銀色の武器、ヴォルフを装備した。

アインハルト「これがーーーーー」

メルフィス「聖王を破った私の力、受けてみるがいいわ!!」

メルフィスから闘気を感じ、アインハルトは即座に身構えた。

すると、メルフィスはアインハルトの懐に入り込み、銀色の武器を装備した右の拳がアインハルトを噴水までぶっ飛ばした。

アインハルト「ぐっ…かはっ!!」

アインハルトは噴水の内に体を強く打ち付け、口から血を吐いた。

メルフィスはアインハルトの頭上から、隕石のように落下してきた。

アインハルト「ーーーーー!!」

空破弾は間に合わない・・・なら!!

アインハルトは拳を水面に薄く沈め

アインハルト「ハッ……!!」

彼女は水を素早く腕を動かし、水を斬った。

ザバアアアア……ン!!!

噴水にあった大量の水が高く浮き上がり、メルフィスに襲い掛かった。

これは水斬りという。普段は自分の拳と速さの力を測るためのものだ。

この場合、アインハルトは目隠しの為に利用したのだ。

メルフィス「悪あがきを!!」

メルフィスは軽々と水の壁を破り、拳に魔力を集中させる。

アインハルト「ーーーーー」

打つんじゃないで貫くんだ、それがこの技の力

メルフィス「ハアアアア……!!!!」

アインハルト「ーーーー覇王」

アインハルトは拳に力を込める。

アインハルト「断空拳!!」

足先から練り上げた力を源に空を切り打ち出す拳は、まさに断空拳である

メルフィス「なっ!？」

落下してきたメルフィスは空中で弾かれ、数メートル離れた場所に着地した。

アインハルト「ハア…ハア…!!」

地面に両手をつき、バリアジャケットが解けるアインハルト。ティオが近寄って鳴く

メルフィス「ーーーー命拾いしたわね」

舌打ちしたメルフィスは銀色の装備を解除し、霧のように消えた。

アインハルト「強い…あれが……魔王の力………」

アインハルトは涙を流した。何故だか自分でもわからない

メルフィスを見ていると、心が痛む。きっと遥か昔に覇王はどこかで魔王に会っているのかもしれない

「????」

そこは暗い暗い神殿だった。

メルフィス「ただいま戻りました」

「???」「ご苦労だったな」

神殿で膝をついたメルフィス。その前では、歪な仮面を被った男が立っていた。

メルフィス「はい…」

アルザス「それにしては随分と体を叩きつけたようだな」

メルフィスは背後に現れたアルザスを見た。アルザスはメルフィスに近寄り、彼女の頬を撫でた。

メルフィス「大丈夫ですわ、アルザス様：／／／／／」

メルフィスは頬を赤く染めた。

「???」「アハハハハハ！」

その横から高笑いと共に、一人の女性が近寄ってきた。メルフィスはその女性を見て、少しだけ気分が悪くなった。なにせこの女は、自分が一番嫌っている女だからだ。

「???」「毎度の事ながら笑わせてくれるじゃないかい、メルフィスちゃん」

メルフィス「勝手に笑えばいいわ」

???「あんなちびっこに遅れをとるなんて、アナタも随分と弱くなったものね」

メルフィス「oooooooooo!!」

???「やめないか、二人とも」

男は神殿の奥で何かを見つめていた。

女性とメルフィスは構えを解いた。

???「まだ我らは目覚めたばかり…それに、覚醒しない羊たちにはそれ相応の魔力が必要になる。」

すると、メルフィスの隣にいた女性はゆっくりと男に近づき膝をついた。

???「ならばその役目、私にお任せを」

???「ほう……」

???「魔力収集に最適な場所がございます…」

第4話 森林の誘惑者（後書き）

―次回予告―

はやて「エクセルくんやなかったか…」

エクセル「当たり前だ…」

フェイト「じゃあ、今私を口説ける？（笑）」

エクセル「フェイトいつの間に！？／／／／／」

フェイト「出来ないの？」

エクセル「いやゝあはは…その、なんというか……恥ずかしい／／／／／」

二人「／／／／／／／／／」

はやて「はいはい…じゃあ次回タイトル行くでえゝ

次回 儚き過去の残像」

エクセル「／／／／／／／／／」
フェイト「／／／／／／／／／」

はやて「いつまで赤くなってるんやー!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6860w/>

魔法少女リリカルなのは ANGEL'S OF DARKNESS

2011年10月29日20時10分発行